

唐代詩人新疑年録 (1)

—殷遙・王之渙・賈至・賈島・韓偓・韓愈・貫休・
牛僧孺・元結・元稹・權德輿・高適—

植 木 久 行

序

近年、唐代詩人の伝記研究は、とくに中国においてめざましい。これは従来、一般に依拠されてきた聞一多「唐詩大系」(『聞一多全集』⁽¹⁾四所収)に記す詩人の生没年に、誤りや臆測の多いことがしだいに認識されてきたことを主因の一つとする。詩人の生没年を中心とした伝記研究の専著として、傅旋琮『唐代詩人叢考』(中華書局、一九八〇年)、譚優学『唐詩人行年考』(四川人民出版社、一九八一年)、王達津『唐詩叢考』(上海古籍出版社、一九八六年)、羅聯添『唐代詩文六家年譜』(学海出版社、一九八六年)などがつぎつぎと刊行された。他方、上掲の著書以外の詩人年譜や、伝記研究の論文・著書の名称は、楊殿珣編『中国歴代年譜総録』(書目文献出版社、一九八〇年)と、それを補足する楊殿珣輯「『中国歴代年譜総録』続録」(『文献』十三輯、一九八二年)、および潘樹広編「唐代作家年譜総録」(『唐代文学研究年鑑』一九八五年版、一九八七年刊所収)によって、ほぼその大要をつかむことができる。もちろん、前掲の三種には、台湾や日本における研究成果は、ほとんど記されていない。たとえ著録された文献であっても、『東洋学文献類目』や国立国会図書館所蔵『中国語・朝鮮語雑誌目録』などに見えないものが少なくない現在、近年の新しい成果の全貌を

把握して、ひとつひとつその適否を検討することは、かなり至難のわざである。

ところで、筆者は、松浦友久編『校注 唐詩解釈辞典』（大修館書店、一九八七年）のなかで、「唐詩年表」の編纂に従事した。このとき、当時入手しえる資料を中心に、「年譜類目録（稿）」を作成した。そのさい痛感したことは、唐詩の研究者であっても、一部の関心ある詩人を除いては、伝記研究の新しい成果をあまり知らず、つぎつぎと提出される新説の適否についても、その論拠をひととおり検討した有益な文献は、管見のおよぶかぎり絶無に近い。中国の研究者による新説には見るべき成果も多いが、同時にまた、新説を軽率に提出しすぎる嫌いがある。このため、現時点において、入手しえる資料にもとづいて、詩人の生卒年代だけでも、その論拠の信憑性を検討しておくことが強く要望されるわけである。もちろん、研究は年ごとに進展し、関係資料も増加する。しかし、伝記研究の新たな発展のためには、現時点での諸説の整理と論拠の確認が急務であるといつてよい。

こうした観点に立ち、筆者は唐代の詩人に対して、その生没年代の論拠資料を整理し、諸説の異同を検討しつつ、いささか私見を加えた。ただこの、いわば新疑年録の作成には、かなり多くの時間と紙幅が必要となるため、基本的には詩人名の五十音順に従いつつも、ひとまず整理と検討を完了した詩人から順次発表していきたい。なお、現代中国語で書かれた論文の場合、その論拠をわかりやすくするために、論旨をそこなわない程度に、適宜、補足を加えたり、節略を試みたりして訳出している点を了解いただきたい。「」の記号は、こうした筆者の補足をあらわす。

ちなみに、続稿では、韋応物・韋莊・王維・王勃・王建などをとりあげる予定である。

注

- (1) 本稿では、生活・読書・新知三聯書店、一九八二年再版を用いる。
- (2) 岑仲勉「賈島詩註与賈島年譜」(『学原』第一卷第八期、一九四七年)には、聞一多「全唐詩人生卒年考」稿本について、「聞

氏之推測、度不外依拠個人交際或登第時代來估計、但須知結交許是忘年、窮通最難臆料、其能十而中一者鮮矣」と評される。

(1) 殷遙

○生年未詳——玄宗天宝二年癸未（七四三）ごろ没？ 享年未詳。

殷遙の生没年は、従来、未詳である。聞一多「唐詩大系」では、七〇九—七四八？ とするが、確証はないらしい。今日、唐の芮挺章編『国秀集』巻中に、王維の「送殷四（遙）葬」（「哭殷遙」詩として知られる作品）が収められることによって、殷遙は少くとも天宝三載（七四四）以前に没したことを確認することができる。というのは、『国秀集』の選詩範囲は、開元年間から天宝三載までの期間であるからである（樓穎の序）。

殷遙の没年については、陳鉄民「儲光羲生平事跡考弁」（『文史』十二輯、一九八一年）のなかで、

① 『唐詩紀事』巻一七に、「天宝間、終於忠王府曹參軍^{（1）}」とある。

② 『国秀集』のなかに、王維作「送殷四葬」詩を収める。

の二点によって、殷遙は天宝元・二・三載の間に没したはずであるとし、同論文に付す年表には、天宝二年（七四三）に繫年する。

他方、王從仁「雜考二則」（『唐代文学論叢』一九八二—）のうちの、「殷遙生卒年及里貫・仕履考略」でも、陳鉄民と同じ論拠によって、天宝二年ごろ没と推測する。王從仁の論文では、生年に対しても新説を提出している。殷遙の生年は、正確にはわからないとしながらも、

① 孟浩然（儲光羲の誤り^{（2）}）の「同王十三維哭殷遙」詩に、「生理無不尽、念君在中年」とある。

② 王維「哭殷遙」詩に、「慈母未及葬、一女纔十齡」とある。

の二点にもとづいて、殷遙の没時を四十歳ごろと臆測し、その生年は没年（天宝二年ごろ）から逆算して七〇〇年ごろとした。

この王従仁の臆測によれば、聞一多説よりも九年早く生まれたことになる。ただし、論拠となる「中年」の語自体は、かなり幅のある用法⁽³⁾をもち、殷遙の没時、一人娘がわずかに十歳であったという表現も、生年を確定する有効な決め手にはならない。したがって、七〇〇年ごろの生まれとする王従仁の説は、現在のところ、参考程度にとどめおくべきであろう。

ところで、陳鉄民・王従仁両氏の没年推定の有力な論拠となる『唐詩紀事』の「天宝間、終於忠王府〔倉〕曹參軍」の文には、じつは問題がある。布目潮風・中村喬『唐才子伝之研究』（汲古書院）では、

忠王は、のちの肅宗で、忠王には開元十五年（七二七）に封ぜられた（旧「唐書」卷一〇、新「唐書」卷六 肅宗紀）。しかし開元二十六年に太子となっているから、天宝間のことではないはず。

と指摘する（一三八頁）。とすれば、その没年の上限はやや流動化してこよう。この点は、今後充分検討する余地があり、没年自体もやや溯る可能性がある。

注

- (1) 『新唐書』卷六〇、芸文志、包融詩の条の注に、「忠王府倉曹參軍殷遙」とある。
- (2) 儲光羲には、さらに「新豊作胎殷四校書」詩がある（『全唐詩』卷一三八）。
- (3) たとえば、潘岳の「夏侯常侍誄」（『文選』卷五七）では、四十九歳没の夏侯湛のことを「中年隕卒」とする。

(2) 王之渙

○則天武后垂拱四年戊子（六八八）生——天宝元年壬午（七四二）没、享年五十五歳。

〔論 拠〕

天宝二年（七四三）に成る、河南府永寧県尉、まげの斬能撰「唐故文安郡文安県太原王府君墓誌銘並序」に、「以天宝元年二月十四日遘疾、終於〔文安県〕官舎。春秋五十有五」とある。生年は享年から逆算。

〔備考〕

斬能の墓誌銘の全文は、岑仲勉の「続貞石証史」（『歴史語言研究所集刊』第十五本「一九四八年」、のち、『金石論叢』（上海古籍出版社、一九八一年）に再録）「王之渙誌」の条のなかで初めて紹介され、長く不明であった王之渙の生没年がようやく確定した。のち、その墓誌銘は、傅璇琮「斬能所作王之渙墓誌銘跋」（『唐代詩人叢考』所収）のなかに、文字の一部を訂正して再録された。かくて、『唐詩紀事』卷二六、王之渙の条に、「天宝間人」とあるのは、天宝元年の死であることを考えると、不適切であり、聞一多「唐詩大系」の「六九五―？」説も、もちろん誤りである。

注

- (1) 斬能の事跡について、傅璇琮の前掲論文では、『冊府元龜』卷六四三、貢奉部、考試一の記述にもとづき、開元二十九年（七四一）、「明四子科」に及第し（『登科記考』卷九も同じ）、それで河南府永寧県尉を授かったとする。これに對して、馬茂元「王之渙生平考略」では、『唐詩紀事』卷二〇、王冷然の条に引く冷然の「上相国燕公〔張説〕書」にもとづいて、開元年間、襄州刺史であったとし、天宝年間の初め「墓誌銘執筆時」に永寧県尉であるのは、おそらく左遷された結果であらうとする（『晚照樓論文集』〔上海古籍出版社、一九八一年〕に収める「唐詩札叢」）。今、にわかに兩説の適否を定めがたく、二説を併記する。

(3) 賈 至

○玄宗開元六年戊午（七一八）生——代宗大曆七年壬子（七七二）没、享年五十五歳。

〔論 拠〕

『新唐書』卷一一九、賈曾伝の付伝に、「大曆」七年、以右散騎常侍卒、年五十五」とある。生年は享年から逆算。

〔備考〕

『旧唐書』卷一九〇中、文苑伝中の賈至の条には、「大曆」五年、転京兆尹、兼御史大夫、卒」とある。前引の『新唐書』によれば、文中の「大曆五年」は、賈至の没年を明記したのではないことがわかる。ちなみに、『唐詩紀事』卷二二、賈至の条には、「大曆中、位右散騎常侍、卒」とある。

(4) 賈島

○代宗大曆十四年己未（七七九）生——武宗会昌三年癸亥（八四三）没、享年六十五歳。

〔論拠〕

賈島の没した翌年に成る蘇絳の「唐故司倉參軍賈公墓銘」⁽¹⁾（『唐人八家詩』本〔汲古閣版〕に収める『長江集』所引による）に、「会昌癸亥歳〔三年〕七月二十八日、終於郡〔普州〕官舎。春秋六十有五」とある。生年は享年から逆算。

〔備考〕

『全唐文』卷七六三に収める蘇絳の「賈司倉墓誌銘」には、享年の部分を「春秋六十有四」に作り、前掲の「六十有五」とは異なっている。岑仲勉「賈島詩註与賈島年譜」⁽²⁾（『学原』第一卷第八期、一九四七年所収）によれば、道光十六年『安岳県志』卷六や、乾隆元年『四川通志』卷四四に収める墓誌も、ともに「春秋六十有四」に作るという。したがって享年を六十四歳とする説も、当然生じてくるわけである。

しかし、『新唐書』卷一七六、韓愈伝に付す賈島の条には、「会昌初、以普州司倉參軍、遷司戸。未受命卒。年六

十五」(中華書局標点本)とあるため、やはり「春秋六十有五」と考えるほうが自然であろう。李嘉言の「賈島年譜」(『長江集新校』所収)は、これに従う。

ちなみに、『新唐書』前引の「未受命卒、年六十五」の年齢の表記は、清代の殿版などには、「年五十六」に作る。⁽³⁾かくて、賈島の生没年を「七八八—八四三」とする説も生じてくる(清の呉修『統疑年録』、羌亮夫『歷代名人年里碑伝総表』⁽⁴⁾など)。しかし、この点については、李嘉言の「賈島年譜」に、

① 百衲本には、享年を「六十五」に作る。

② 前掲の蘇絳の墓誌に「六十有五」とある。

の二点にもとづいて、殿版の「年五十六」は「年六十五」の誤倒である、と見なす説に従うべきであろう。この点の傍証として、岑仲勉の前掲論文や、王達津「関于賈島」(『唐詩叢考』所収)では、

賈島の「黄(皇)子陂上韓吏部(愈)詩(長慶四年(八二四)作)⁽⁵⁾」に、「石樓云一別、二十二三春」とあることと、

賈島・韓愈兩人の事跡を考慮すれば、その最初の出会いは貞元十七年(八〇二)と推定される。⁽⁷⁾当時、より若い賈島の年齢は二十三歳である。殿版の「五十六歳」没によれば、十四歳になって、やや若すぎることになる。

と述べて、六十五歳説を支持する。

〔補遺〕

『四庫提要』卷一五〇、別集類三の「長江集」の条には、賈島が宣宗の大中九年(八五五)までは生存していたとする俗説が紹介されている。この俗説の誤りは古くから指摘されており、多言を要しない。⁽⁸⁾蘇絳の墓誌こそ、賈島の生没年を確定しえる基本文献であるといえよう。

注

- (1) 小川環樹編『唐代の詩人―その伝記』（大修館書店）のなかに、荒井健の訳注があり、参考になる。
- (2) 章泰筌「賈島年譜」（『賈島研究』〔正中書局、一九四七年〕所収）は、これに従い、「七八〇―八四三」とするらしい（『中國歷代年譜総録』に拠る）。
- (3) 近藤光男編『四庫全書総目提要 唐詩集の研究』（研文出版）の「長江集」の条（大木康執筆）の調査によれば、百衲本・汲古閣本は「六十五」、明の北藍本・清の殿版は「五十六」に作るという。
- (4) 台湾商務印書館、一九六五年刊による。
- (5) 王達津「関于賈島」では、「韓愈僅在長慶三年（八二三）任吏部侍郎、旋任京兆尹、則詩当作于長慶三年」とするが、韓愈の吏部侍郎在任期間は、長慶二年九月と長慶三年六月、および、長慶三年十月（再任）と長慶四年八月である（嚴耕望『唐僕尚丞郎表』卷十、輯考三下などに詳しい）。この点は、王達津の論は杜撰であるが、その主旨は岑仲勉と同じである。詩の作成年代を長慶四年とするのは、李嘉言「賈島年譜」による。岑仲勉も同意見である。
- (6) 王達津は、「云一」の語を「似当作へ一云」とする（前掲論文）。
- (7) ただし、李嘉言は「為賈島事答岑仲勉先生」を書いて反論した（『長江集新校』所収）。なお、錢仲聯『韓昌黎詩繫年集積』卷七の「送無本師〔賈島〕帰范陽」詩の補釈部分も参照。
- (8) 前掲『唐詩集の研究』参照。

(5) 韓 偓

○武宗会昌二年壬戌（八四二）生？——五代後梁龍德三年癸未（九二三）没？〔後梁乾化四年甲戌（九一四）までは確実に在世〕 享年八十二歳？

〔生年の論拠考〕

従来、韓偓の生年を推測した論拠は、李商隱の「韓冬郎即席為詩相送、一座尽驚。他日、余方追吟《連宵侍坐徘徊久》之句、有老成之風。因成二絕寄酬、兼呈畏之員外」詩の、

十歳⁽¹⁾裁詩走馬成 十歳 詩を裁り 馬を走らすごとくに成り

冷灰残燭動離情 冷灰 残燭 離情を動かす

という「十歳」の語である。詩題の「韓冬郎」とは韓偓のこと（冬郎は小字）、「畏之員外」の畏之とは韓偓の父、韓瞻⁽²⁾のあざなである。韓瞻と李商隱は同年の進士（開成二年（八三七））であり、ともに王茂元の女婿にあたっていた。詩は、大中五年（八五二）、李商隱が長安から蜀の梓州（にある柳仲郾の幕府）に赴任する送別会の席上、わずか十歳の韓偓が、「連宵侍坐徘徊久」の句（逸句）を含む送別詩を敏捷に作って、同坐の人々を驚嘆させたことを追憶する。

清の馮浩『玉谿生詩集箋注』巻二では、詩の成立年代に疑問を呈しつつも、東川（梓州）での作であろうと推測し、同書に付す「玉谿生年譜」では、ひとまず大中七年（八五三）の条に繫年する。これを受けて、清の繆荃孫「韓翰林詩譜略」⁽²⁾や震鈞「韓承旨年譜」⁽³⁾などは、大中七年、韓偓は「十歳」であったことを根拠に逆算して、会昌四年（八四四）生年説を唱えた。⁽⁴⁾しかし、馮浩自身は、その送別会は大中六年（八五二）のことと捉えているようであり、これによれば、会昌三年（八四三）説も生じうる余地がある。陳敦貞『唐韓字士偓年譜』（台湾商務印書館刊、新編中国名人年譜集成所収、一九八二年）の八四三年生まれとする説は、別に論拠を明示しないが、この考え方にたつものと思われる（年譜の大中六年・同七年の条参照）。

しかし、李商隱が梓州刺史・東川節度使柳仲郾の節度書記として蜀へ赴任する日時について、近代の張采田撰『玉谿生年譜會箋』巻四では、馮浩説の誤りを指摘して、大中五年（八五二）であることを考証する。より詳しくいえば、張采田は、詩の作成年代を大中十年とし、第一・二句（十歳云々の部分）は、大中五年のときのことを追憶したものである。葉葱奇『李商隱詩集疏注』（人民文学出版社、一九八五年）では、詩の作成年代も送別会も、ともに大中五年であると考え、いづれにせよ、第一・二句の表わす日時は大中五年であり、これは今日の通説といつてよい。この張采

田説にしたがい、大中五年、十歳であったとすれば、韓偓の生年は、二年溯って会昌二年（八四二）になる。この点は、川合康三「韓偓伝」（『唐代の詩人―その伝記』）や、陳伯海「韓偓生平及其詩作簡論」（『中華文史論叢』一九八一―四）、今西凱夫・林卓治「韓偓的初歩考察」（日本大学人文科学研究所『研究紀要』二七号、一九八三年）などに指摘されている。ただこの場合でも、詩中の「十歳」は十歳前後を成数（まとまった数字）で表したのかも知れず、厳密な意味では、生年を確定する信憑性にやや欠ける。したがって、現時点では、韓偓はほぼ会昌二年（八四二）ごろ生まれたと考えておくべきであろう。

〔備考〕

王達津「《宮柳》詩和韓偓的生卒年」（『唐詩叢考』）では、会昌元年（八四一）生まれを唱える。これは、李商隱の「樊南乙集序」（大中七年〔八五三〕作）の自叙にもとづいて、李商隱の梓州赴任を大中四年と考えたためである。その序には、

是歳〔大中三年〕、葬牛太尉〔僧孺〕。天下設祭者、百數。他日、〔京兆〕尹言、「吾太尉之薨、有杜司勳〔牧〕之誌、与子〔李商隱を指す〕之奠文、二事為不朽」。十月、尚書范陽公〔盧弘正〕、以徐〔州〕戎凶悍、節度闕判官、奏入幕。

故事、軍中移檄牒刺、皆不関決記室、判官專掌之。其関記室者、記室仮。故余亦參雜応用。明年、府〔盧弘正〕薨。選為博士、在国子監太学。始主事講經、申誦古道、教太学生為文章。七月、尚書河東公〔柳仲郢〕、守蜀東川、奏為記室。

云々とある。牛僧孺の埋葬は、李珣「故丞相太子少師贈牛公神道碑銘并序」（『全唐文』卷七二〇）によれば、大中三年己巳（八四九）である（ただし、没年は大中二年）。また徐州の乱も大中三年〔五月以降〕の事件である（『資治通鑑』卷二四八）。かくて、李商隱の梓州赴任は、大中三年の「明年」の七月以降のできごととも捉えられそうである。王達津の

説は、大中四年、十歳であるとして生年を逆算したものである。

しかし、王達津の論拠については、張采田自身も疑惑をいだき、その『玉谿生年譜会箋』巻四、大中三年の条には、李商隱の梓州赴任が大中五年であることが動かせない事実であることにもとづいて、盧弘正〔正の字は止にも作る〕の死も大中五年であり、文中の「明年」とは、徐州に鎮した盧弘正に辟召された李商隱が、実際に徐州に到着した年（大中四年）の翌年を意味すると考証する。

盧弘正の死が張采田の説くごとく、大中五年であるのか、あるいは、一年前の中大四年であるのかは、かなり問題となる⁽⁵⁾ところである。しかし、柳仲郢の東川節度使兼梓州刺史の就任は、清の吳廷燮『唐方鎮年表』巻六、および同考証巻下の柳仲郢の条や、王寿南「唐代藩鎮総表」〔唐代藩鎮与中央關係之研究〕大化書局、一九七八年所収〕などを参照すれば、大中五年（八五二）であることは確実である⁽⁶⁾。したがって、その柳仲郢に辟召された李商隱の梓州赴任も、早くとも大中五年であり、王達津の説くごとく大中四年にまで溯らせることはできない。つまり、現在のところ、王達津の会昌元年生年説は、確証に乏しいといえよう。少くとも、李商隱の梓州赴任を大中四年とする点は誤りである。

〔没年の論拠〕

清の康熙八年（一六六九）にはぼ完成した吳任臣の『十国春秋』巻九五、韓偓伝に、「竜徳三年（九三三）、卒於南安〔福建省〕竜興寺、葬葵山之麓」とある。

〔備考〕

吳任臣の依拠した古い資料は現在のところ未詳であり、その信憑性に疑問をいだかせる。岑仲勉は、「唐集質疑」〔唐人行第録〕所収〕に収める「韓偓南依記」のなかで、

劉克莊の「跋韓致光帖」〔後村題跋〕巻四、津逮秘書〕のなかに、韓偓がその妻、裴郡君の死を悼んで作った「裴郡

君祭文」〔今日散佚〕の冒頭に、「甲戌歳」とあること。

を指摘して、韓偓が少くとも天祐十一年（＝乾化四年、九一四）甲戌の歳までは生存していたことを確認した。⁽⁷⁾しかし、その正確な没年は未詳とする。

他方、王達津は、前掲論文のなかで、

① 韓偓の詩の作成年代を表す紀年（の自注）が癸酉の歳（後梁の乾化三年、九一三）で終ること。⁽⁸⁾

② 劉克莊「跋韓致光帖」によれば、妻の死を悼む韓偓の祭文に、「甲戌」（九一四年）とあること。

の二点、いいかえれば、韓偓の詩文の紀年は、九一四年以降は見あたらないことに着目して、韓偓の死は九一四年か、翌年の可能性が強いとする。この傍証として、癸酉の歳（九一三）、南安県で作った「十月七日早起作、時気疾初愈」と題する詩をあげて、韓偓は当時すでに喘息（気喘）の重病にかかっていたと推測する。

この王達津の説は、詩が「気疾初めて愈ゆる」ことを歌う詩であることを考えれば、傍証としての論拠に乏しい。しかし、康正果の「晩唐詩人韓偓」⁽⁹⁾のなかで指摘されるごとく、当時、韓偓はすでに古稀（七十歳）を越えた病弱の身であり、しかも愛妻の死による衝撃を考えるならば、妻の死んだ乾化四年（九一四）以後の数年間に没した可能性を否定できない。いいかえれば、妻の死後、九年間も生きたとする『十国春秋』の説に疑惑が生じるわけである。こうした意味で、王達津・康正果の説は、充分注目に値する一説といえよう。⁽¹⁰⁾

注

- (1) 北宋の銭易『南部新書』巻乙には、「十歳」を「七歳」に作る。ただし、『唐詩紀事』巻六五には、やはり「十歳」に作る。未見。いま、震鈞の「韓承旨年譜」などによる。
- (2) 『香齋集発微』所収。
- (3) 高文頭『韓偓』（新文豊出版公司、一九八四年）に収める「韓冬郎年譜」も同じ。
- (4)

(5) 吳延燮『唐方鎮年表』卷二・同考証卷上や、郁賢皓『唐刺史考』(2) (江蘇古籍出版社、一九八七年)の徐州の条では、盧公正は大中四年没とする。

(6) 郁賢皓『唐刺史考』(5)も同じ。

(7) 陳伯海の前掲論文の注②では、韓偓の「八月六日作四首」は、唐の昭宗が殺された十周年の命日を記念するものであり、乾化四年甲戌(九一四)の作とする(昭宗は九〇四年没)。しかし、その詩は、編年体に構成される部分にあり、一般に乾化二年(九一二)の作とされる(陳敦貞『唐韓学士偓年譜』参照)。蘇仲翔「晚唐四家詩合論」(『唐代文学論叢』総三輯、一九八三年)にも、九一二年、昭宗を殺した朱温が殺されたうわさを聞いて作ったとする。陳伯海の説は詩中の「十年」の語にもとづいたものであり、確証に乏しい。

(8) 韓偓の詩集は、一部分、編年体構成をとり、作詩年代を示す自注がある。

(9) 『陝西師大書報』(哲学社会科学)一九八三年第一期所収。「手風慵展一行書、眼暗休尋九局図」の句で始まる「安貧」詩は、作者の臨終前の生活状況であるとする。

(10) ちなみに、聞一多「唐詩大系」では、八四四? とする。

(6) 韓愈

○代宗大曆三年戊申(七六八)生——穆宗長慶四年甲辰(八二四)没、享年五十七歳。

〔論 拠〕

① 韓愈の門人、李漢の「韓昌黎集序」(東雅堂本など)に、「先生〔韓愈〕生於大曆戊申〔三年〕」とあり、また、「長慶四年冬、先生歿」とある。

② 皇甫湜「韓愈神道碑」(『全唐文』卷六八七)に、「〔長慶〕四年十二月丙子〔二日〕、薨〔長安〕靖安里第、年五十七」とある。

③ 同じ皇甫湜の「韓文公墓誌銘并序」(『全唐文』卷六八七)にも、「其年〔長慶四年〕十二月丙子〔二日〕、遂薨」、「薨

年五十七」とある。

㊦ 韓愈の門人、李翱「故正義大夫行尚書吏部侍郎上柱国賜紫金魚袋贈礼部尚書韓公行状」(『全唐文』卷六三九)に、「長慶四年得病、滿百日假。既罷。以十二月二日、卒於靖安里第」、「享年五十七」とある。

㊧ 『旧唐書』卷一六〇、韓愈伝に、「長慶四年十二月卒。時年五十七」とある。

㊨ 『新唐書』卷一七六、韓愈伝に、「長慶四年卒。年五十七」とある。

㊩ 『唐詩紀事』卷三四、韓愈の条に、「謹按、公生於代宗大曆三年戊申」とあり、また、「長慶四年甲辰、有『南溪始泛』詩。……〔同年〕十二月二日、卒於靖安里。年五十七」とある。

〔備考〕

生年は、享年から逆算しても、大曆三年生まれとなる。なお、宋の呂大防「韓吏部文公集年譜」や宋の洪興祖「韓子年譜」も、生没年は同じである(ともに、『韓文類譜』所収)。

注

(1) 『全唐文』卷七四四には、「唐吏部侍郎昌黎先生諱愈文集序」として見える。

(2) 『唐詩紀事』卷三四、韓愈の条にも引く。

(7) 貫休

○文宗大和六年壬子(八三二)生——五代前蜀永平二年(『後梁乾化二年』)壬申(九二二)没、享年八十一歳。

〔論拠〕

① 禅月大師貫休の弟子曇域撰「禅月集」後序⁽¹⁾(乾德五年〔九三三〕十二月十五日の日付をもつ)のなかに、「壬申

歳〔九二年〕十二月、召門人謂曰、『……』。言訖、掩〔奄〕然而絶息」とある（四部叢刊『禪月集』による）。

④ 贊寧撰『宋高僧伝』卷三〇、「梁成都府東禪院貫休伝」に、「至梁乾化二年、終於所居。春秋八十一」とある。生年は享年から逆算。

⑤ 清の呉任臣『十国春秋』卷四七、前蜀の僧貫休伝にも、「永平二年卒、年八十一」とある。

〔備考〕

『四庫提要』卷一五一、別集類四、禪月集の条には、貫休の没年について、「至乾德癸未〔五年〕九二三〕卒。年八十一」と記す。しかし、これは、すでに陳垣『釈氏疑年録』卷五の条に指摘されるごとく、曇域撰「後序」の執筆年時を、貫休の没年に見誤った軽率さにもとづく。ちなみに、『釈氏疑年録』には、同光三年〔九二五〕卒（『歴代編年』釈氏通鑑）や、乾化四年〔九一四〕卒（『宗統編年』）の異説が紹介されるが、曇域の後序こそ、最も信頼できる文献であるといえよう。

ちなみに、林元白「貫休の生平及其詩」（『現代仏学』一九五八—一九六〇）や、小林太市郎『禪月大師の生涯と芸術』（小林太市郎著作集3、淡交社刊）は、もちろん、「八三二生—九一二没」である。⁽²⁾

注

- (1) 『全唐文』卷九二二、曇域の条には、これを「禪月集序」とする。「後序」は別のものを指す。
- (2) 馬凌霄「貫休入蜀の時間及生卒年補証」（『文学遺産』一九八一—一九八二）には、『古今詩話』に、貫休が永平二年に卒したという記載があるとするが、郭紹虞校輯『宋詩話輯佚』に収める『古今詩話』には見あたらないようである。

(8) 牛僧孺

○德宗建中元年庚申（七八〇）生——宣宗大中二年戊辰（八四八）没、享年六十九歳。

〔論 拠〕

① 杜牧「唐故太子少師奇章郡開國公贈太尉牛公墓誌銘并序」に、「大中二年十月二十七日、薨于東都〔洛陽〕城南別墅、年六十九」とある（杜牧『樊川文集』卷七〔陳允吉校本、上海古籍出版社〕による）。生年は享年から逆算。

② 李珣「故丞相太子少師贈太尉牛公神道碑銘并序」〔『全唐文』卷七二〇〕に、「公以大中戊辰歲〔二年〕十二月二十九日薨」とある（享年の記載はない）。

③ 『新唐書』卷一七四、牛僧孺伝に、「宣宗立、徙衡・汝二州、還為太子少師。卒、贈太尉、年六十九」とある（没時の年月の記載はない）。

〔備 考〕

没年の日時については、杜牧（十月二十七日）と李珣（十二月二十九日）では異なる。前者については、『文苑英華』巻九三八、『唐文粹』巻六八、『全唐文』巻七五五においても、文字の異同はない。これに対して、後者は、『唐文粹』巻五六（国学基本叢書）には、「十月二十九日」に作る（『文苑英華』巻八八八は、『全唐文』と同じ）。「二」の字は衍字か。ただ「十月」の場合でも、「二十七日」と「二十九日」の異同がある。「七」と「九」の二字は流伝上、誤りやすく、にわかにその適否を定めがたい。

ちなみに、聞一多「唐詩大系」や羌亮夫『歷代名人年里碑伝総表』では、牛僧孺の生没年を「七七九〔大曆十四年〕〜八四七〔大中元年〕」とするが、これは明らかに誤りである。『旧唐書』巻一七二、牛僧孺伝に、「大中初卒」とある。その「大中〔年間〕の初め」とは、元年ではなく、二年をいう。

なお、中国では、牛僧孺の生年を大曆十四年（七七九）とする説が、かなり流布している。魏明文は、『甘肅古代作家』（甘肅人民出版社、一九八二年）の牛僧孺の条で、この原因を、「譚正璧『中国文学大辞典』や劉大傑『中国文学

『新編第二冊三六五ページ』などの誤りを襲うもの」とする。

今日、王夢鷗の簡略な牛僧孺年譜が、『唐人小説研究』四集（芸文印書館、一九七八年）のなかに収められている（一六七～一七八ページ）。

〔補遺〕

白居易の「宿香山寺、酬広陵牛相公見寄」詩には、「猶去懸車十四年」の句があり、「相公今年五十七」の原注が付されている（顧学頴校点『白居易集』卷三三）。この詩は、花房英樹『白氏文集の批判的研究』所収の「綜合作品表」や、朱金城の『白居易年譜』（上海古籍出版社、一九八二年）によれば、大和六年（八三五）の作である。しかし、大和六年、五十七歳とすれば、牛僧孺の生年は七七九年となつて、「七八〇年」と合わない。したがって、この詩は、むしろ翌年の開成元年（八三六）の作と考えるべきであろう。別集の詩の配列や牛僧孺の事跡を考えてみても、開成元年の作として少しも問題はない。ちなみに、王夢鷗の前掲年譜は、開成元年作とする。

(9) 元結

○玄宗開元七年己未（七一九）生——大曆七年壬子（七七二）没、享年五十四歳。

〔没年の論拠〕

顔真卿の「唐故容州都督兼御史中丞本管経略使元君表墓碑銘并序」⁽¹⁾に、「〔大曆七年〕夏四月庚午〔二十日〕、薨於〔長安〕永崇坊之旅館、春秋五十」とある（『全唐文』卷三四四）。

〔生年の論拠考〕

元結の生年は、古くは開元十一年癸亥（七二三）と考えられた。この旧説の論拠は、

① 顔真卿の前掲墓碑銘に、「春秋五十」とある。

② 『新唐書』卷一四三、元結伝に、「罷還京師、卒、年五十」とある。

の享年の記述である（生年は享年から逆算）。清の呉修『統疑年録』をはじめとして、聞一多「唐詩大系」や荒亮夫『歴代名人年里碑伝総表』などは、この立場である。⁽²⁾

これに対して、孫望は、『元次山年譜』⁽³⁾のなかで、次のような二つの論拠をあげて、開元七年（七一九）生まれ、享年五十四歳という新説を提出した。

① 元結「別王佐卿序」に、「癸卯歳、京兆王契佐卿、年四十六。河南元結次山、年四十五」とある（『全唐文』卷三八二）。文中の「癸卯」とは、代宗の広徳元年（七六三）を指す。⁽⁴⁾ これにもとづいて逆算すれば、生年は開元七年（七一九）となり、没年の大暦七年（七七二）には、五十四歳となつて、「五十歳ではない」。元結は、序文のなかで自己の年齢を誤記するはずはない。

② 乾元二年（七五九）に成る元結の「与韋尚書〔陟〕書」に、「〔元〕結所以年四十、足不入於公卿之門、身不齒於利祿之士」とある（『全唐文』卷三八二）。乾元二年、「新説の開元七年生まれとすれば」、四十一歳である。書中の「年四十」とは、成数（まとまった数字）によるか、あるいは、本年（乾元二年）を数えずにいう。本年（乾元二年）、礼部尚書・東都留守韋陟に拜謁して、「公卿の門に入った」ことになるから。顔真卿の碑銘の享年にもとづく七二三年生年説では、当時（七五九年）、元結は三十七歳であり、したがって「結所以年四十、足不入於公卿之門」とはいえない。

〔備考〕

孫望の新説は説得力があり、今日の定説となっている。

ちなみに、湯擊民「元結和他的作品」⁽⁵⁾も、孫望の説と同じ論拠で新説（七一九年生、享年五十四歳）を提唱するが、孫望の〈年譜〉には全く言及していない。同論文では、さらに、竜襲の「詩人元結」〔『文学遺産増刊』二輯、一九五六年〕の「開元七年（七一九）生——大曆四年（七六九）没」説に対して、

① 生年は正しい〔孫望説と同じ〕

② 没年の論拠は未詳であるが、墓碑の「春秋五十」にあわせるために三年くりあげたものか。と述べて、次のごとく反論する。

顔真卿は元結の友人である。元結の生年や享年に対しては、誤記する可能性もあるが、その没年までも誤記することはありえない。その大曆四年没の説は誤りである。

湯擊民の説は、穏当な発言といえよう。

注

- (1) 『唐代の詩人——その伝記』には、京都大学人文科学研究所蔵の拓本（顔真卿自筆）を基にした小栗英一の訳注を収める。留元剛の「顔魯公年譜」によれば、大曆十年（七七五）、顔真卿六十七歳のときの作である。ちなみに、王昶『金石萃編』卷九八には、大曆七年の作とする。
- (2) 湯擊民の上掲論文によれば、孔徳「唐元結年譜」（一九四八年の『中山大学文史集刊』第一冊所収）も、七二三年生まれとするらしい。
- (3) 古典文学出版社、一九五七年。同書の後記によれば、初稿は一九三四年に完成し、その翌年、『金陵大学文学院季刊』に発表されたという。
- (4) この点は、すでに清の徐松『登科記考』卷九、天寶十三載の条にも指摘されている。
- (5) 『中山大学学報』一九五七年一期、のち『唐詩研究論文集』（人民文学出版社、一九五七年）に再録。

○代宗大曆十四年己未（七七九）生——文宗大和五年辛亥（八三一）没、享年五十三歳。

〔論 拠〕

① 白居易「唐故武昌軍節度処置等使、正議大夫、檢校戸部尚書、鄂州刺史兼御史大夫、賜紫金魚袋、贈尚書僕射、河南元公墓誌銘并序」⁽¹⁾に、「大和五年七月二十二日、遇暴疾、一日薨于位。春秋五十三」とある（顧学頤校点『白居易集』巻七〇）。生年は享年から逆算。

② 『旧唐書』巻一六六、元稹伝に、「〔大和〕五年七月二十二日暴疾、一日而卒于鎮。時年五十三」とある。

③ 『旧唐書』巻一七下、文宗紀に、「〔大和五年八月〕庚午〔五日〕、武昌軍節度使・檢校戸部尚書元稹卒」とある。

④ 『新唐書』巻一七四、元稹伝に、「俄拜武昌軍節度使。卒、年五十三」とある。

⑤ 白居易「和微之道保『元稹の子の名』生三日」詩の自注に、「子老微之七歳」とある（『白居易集』巻二八）。白居易の生年は大曆七年（七七二）であるので、元稹のそれは、七歳下の七七九年となる。⁽²⁾

⑥ 元稹「叙詩寄樂天書」に、「又不幸、年三十二時有罪譴棄」とある（冀勤点校『元稹集』巻三〇）。この事件は、元和五年（八一〇）の江陵府士曹参军への左遷を指す。したがって生年は七七九年となる。⁽³⁾

⑦ 『旧唐書』元稹伝に、「二十八応制筆才識兼茂・明於体用科、登第者十八人、〔元〕稹為第一、元和元年四月也」とある。元和元年（八〇六）、二十六歳であったことから逆算すれば、生年は七七九年となる。

〔備 考〕

⑧ の元稹の死亡日時（八月庚午〔五日〕）は、①②に記す七月二十二日と異なる。その八月五日とは、卞孝萱『元稹年

譜』(齊魯書社、一九八〇年)などに指摘されるごとく、元稹の死亡日ではなく、じつは朝廷が元稹の死亡通知を入手したときをいう。

ちなみに、『唐詩紀事』卷三九、白居易の条に、「微之生於德宗建中元年庚申(七八〇)、卒於大和五年、時年五十三」とあるが、その生年(七八〇)は七七九年の誤り。また聞一多「唐詩大系」に、「七七八—八三一」とある生年も誤りである。単純な計算ちがいか。

〔補遺〕

宋の趙令時『侯鯖録』卷五に収める「微之年譜」にも、「己未代宗大曆十四年是歲、微之生」「辛亥〔大和〕五年是歲、薨于夔」
とあって正しい。

注

- (1) 『全唐文』卷六七九。大和六年(八三二)の作。
- (2) 花房英樹編『元稹研究』(彙文堂書店、一九七七年)のなかで指摘される。
- (3) 薛鳳生『元微之年譜』(台湾學生書局、一九七七年)のなかで指摘される。
- (4) 薛鳳生『元微之年譜』にも、「蓋微之卒訊、八月始聞於朝也」とある。

(1) 権徳輿

○肅宗乾元二年己亥(七五九)生——憲宗元和十三年戊戌(八一八)没、享年六十歳。

〔論拠〕

① 韓愈の「唐故相権公墓碑」に、「公在相位三年、其後以吏部尚書授節鎮山南、年六十以薨」とあり、また「以疾求還、〔元和〕十三年某月甲子、道薨于洋〔州〕之白草」とある(馬其昶『韓昌黎文集校注』卷七)。

㊦ 『旧唐書』卷一五、憲宗紀、元和十三年八月の条に、「戊寅（二十七日）、前山南西道節度使權德輿卒」とある。

㊧ 『旧唐書』卷一四八、權德輿伝に、「（元和）十三年八月、有疾、詔許歸闕、道卒、年六十」とある。

㊨ 『新唐書』卷一六五、權德輿伝に、「復檢校吏部尚書、出為山南西道節度使。後二年、以病乞還、卒於道、年六十」とある。權德輿の山南西道節度使就任は、『旧唐書』本伝にみえる「（元和）十一年、復以檢校吏部尚書出鎮興元」の記事を指す。⁽²⁾つまり、その没年は、元和十一年の二年後（後二年）の元和十三年である。

〔補遺〕

『嘉定鎮江志』卷十八、人物、權德輿の条に、「（元和）十三年、以病乞還、道卒」とある。ちなみに、楊於陵の「祭權相公文」は、元和十四年七月六日に作られた（『全唐文』卷五二三）。

注

(1) この「甲子」は、具体的な干支を入れることを省略したことを表す。清水茂「權德輿伝」の訳注参照（『唐代の詩人―その伝記』）。

(2) 『旧唐書』卷十五、憲宗紀にも、「（元和十一年）冬十月丁巳、以刑部尚書權德輿檢校吏部尚書、兼興元尹、充山南西道節度使」とある。

(12) 高適

○則天武后聖曆三年（ユ久視元年）庚子（七〇〇）、もしくは、翌年の則天武后長安元年辛丑（七〇一）生？——代宗永泰元年乙巳（七六五）没、享年六十五、六歳？

〔没年の論拠〕

① 『旧唐書』卷十一、代宗紀の永泰元年正月の条に、「乙卯（二十三日）、左散騎常侍高適卒」とある。

㊦ 『旧唐書』卷一一一、高適伝に、「永泰元年卒」とある。

㊧ 『新唐書』卷一四三、高適伝に、「永泰元年卒」とある。

〔備考〕

『全唐詩』卷二二一、高適の小伝に、「永泰二年卒」とあるのは、テキストの誤り。

〔補遺〕

『唐詩紀事』卷三三、高適の条には、「永泰初卒」とあり（『唐才子伝』卷二も同じ）、晁公武『郡齋讀書志』卷四上、高適集の条には、「永泰中、終散騎常侍」とある。ちなみに、杜甫の「聞高常侍亡」詩は、詩中の「蜀使忽伝亡」の語によって、永泰元年、成都での作とされる（『杜詩詳注』卷一四に引く黄鶴の説）。

〔生年の論拠考〕

高適の没年は、すでに見たごとく、永泰元年に確定することができる。しかし、前掲書には、いずれも享年の記載がないため、生年には異説が多い。これは、論拠が詩中の表現であるため、生年を確定しにくいのである。ここでは、現在のところ、最も有力な説を二つとりあげ、それを中心に論を進めたい。

(A) 周勳初『高適年譜』（上海古籍出版社、一九八〇年）にみえる「七〇〇年生まれ」の説。

〈周説の論拠資料〉

① 高適「奉酬北海李太守（舊）丈人夏日平陰亭」詩（以下、①詩と略称）に、「一生徒羨魚、四十猶聚螢」とある（聚螢は、仕官できずに苦勞する比喩、車胤の故事）。天宝五載（七四六）の作。

② 高適「留別鄭三・韋九（健）、兼洛下諸公」詩（②詩）に、「蹇躓蹉跎竟不成、年過四十尚躬耕」とある。天宝八載（七四九）の作。

- ③ 李頎「贈別高三十五〔適〕」詩(◎詩)に、「五十無産業、心輕百万資」とある。天宝八載(七四九)の作。
- ④ 高適「答侯少府」詩(④詩)に、「常日好讀書、晩年学垂綸」とある。天宝十載(七五二)の作。ただし、引用部分は、天宝八載当時のことを指す「垂綸とは、釣り糸を垂らす意で、仕官できずに隱棲する態度の比喩」。

〈周説の論証〉

①の「四十猶聚螢」を、もし実数にとれば、逆算して七〇六年生まれとなるが、③④の詩句と合わない(③の七四九年当時、高適は四十四歳となり、これでは「五十無産業」といえない。また、四十四歳では、「晩年」(④の詩句)ともいえない。周勳初は、「晩年」とは半百(五十歳)以上を指すとする)。

③の「五十無産業」の「五十」を虚数(事実ではない数字)と見なせば、②と④の詩句に支障が生ずる。もしその「五十」が五十歳の前を指すならば、四十歳ぐらいの人は「晩年」と自称するはずはなく、④の詩句とくい違ふ。もし「五十」を実数と定め、「四十」を虚数と見なせば、①②④の詩句もみな通じ、他の材料の問題も容易に解決できる。これにもとづいて逆算すれば、七〇〇年生まれとなる(この生年説によれば、①のとき、四十七歳で「四十猶聚螢」といえるし、また②の七四九年、五十歳のときの詩句「年過四十尚躬耕」や、④の同年のことを指す「晩年」の言葉ともかなう。④の場合、どうにか半百に達し、「晩年」と自称する資格が生じたと考えたわけである)。

この周説は、論拠の資料になる四詩句をどうにか満たすように考案されたものであるが、問題が全くないわけではない。たとえば、②の「年は四十を過ぎて尚ほ躬耕す」の表現は、詳しい説明がないかぎり、五十歳のときの言葉にはすぐわなないようにも思われる(ただし、この弱点は、後述の蕭滌非らの補足説明によって克服される)。

ちなみに、譚優学の「高適行年考」(『唐詩人行年考』)では、①に対して、四十七歳では、当然、「五十猶聚螢」と

いふべきであり、「四十猶聚螢」とはいえないと考えて、「四十」を実数を見なす。しかし、七〇七年生まれを支持する譚優学の説では、◎詩の制作時代、高適は四十三歳であり、「五十無産業」の表現と大きくくい違ふ。譚優字自身は、この弱点に対して、高適との交遊関係の浅い李頎は、彼の年齢をよく知らなかったのだと釈明するが、自説に都合のよいように解釈する、ある種の恣意性が感じられ、説得力に欠ける。⁽¹⁾高適の生年を確定しうる決定的な資料のない現時点では、生年に関する諸資料を入念に検討して、できる限り矛盾の生じない生年を想定すべきであろう。ただ周説にあっても、五十歳なら晩年と自称でき、四十九歳（以下）なら不可能とする議論は、やや強弁の印象を与えよう。

蕭滌非・余正松「高適」(呂慧鵬ら編『中国歴代著名文学家評伝』第二卷所収)⁽²⁾では、この周説を支持すると同時に、以下の三点(⑥⑦)をあげて論拠の不足を補強する。

⑤ 高適の「別章参军」詩に、「二十解書劍、西遊長安城」とある。しかし、「上書して天子に謁見する」願いはかなわず、以後長く隠棲して、天宝八載(七四九)のとき、初めて仕官した。高適は晩年、「人日寄杜二拾遺〔甫〕」詩のなかで、この隠棲〔無官〕時代を回顧して、「一臥東山三十春」と歌う。つまり、高適は二十歳のとき初めて入京し、その後、「三十春」の隠棲生活を経て、天宝八載の仕官時には、高適はちょうど年齢が五十歳である。これは、李頎の「五十無産業」の句(◎詩)とたいそうかなう。

⑥ 高適の七〇二年生まれ(同書によれば、高文「試論高適」⁽³⁾の説)や、それ以後に生まれたとする諸説は、ほとんどみな、天宝八載(七四九)、封丘の尉に赴任するさいの高適の詩句——「年過四十尚躬耕」(⑥詩)を、高適がちょうど四十歳を過ぎたばかりのころの作、と考えて、その生年を逆算したものである。しかし、その詩のなかほどにいう

〔韻字を区別する記号は、引用者の注〕。

蹇蹟蹉跎竟不成 年過四十尚躬耕○

長歌達者杯中物 大笑前人身後名○

幸逢明聖多招隱● 高山大沢徵求尽●

此時亦得辭漁樵◎ 青袍裹身荷聖朝◎

前の四句は、明らかに長期間の不遇生活を回想したものであり、その「時間性」はかなりつかみどころがない。後の四句は、詩意と脚韻の転換につれて、はじめて封丘の尉を授かった時期「天宝八載」に迫る。したがって、「年は四十を過ぐ」と「此の時」（天宝八載）とは、相異なる二つの時間観念である。

⑦ 七〇六年生年説（彭蘭「高適系年考証」⁽⁴⁾）は、「四十猶聚螢」(②詩)の「四十」を実数として生年を逆算したものである（ただし、彭蘭は、②詩を天宝五載ではなく、同四載の作とする）。しかし、この生年説では、天宝八載（七四九）の仕官時には四十四歳にすぎず、李頎の「五十無産業」(③詩)と大きくくい違ふ。また、高適の「一臥東山三十春」〔前掲の論拠補足⑤参照〕の数字とも隔絶する〔彭蘭説では、無官隠棲期間が二十四年間であり、「三十春」の表現と大きく異なる〕。つまり、「四十猶聚螢」詩の「四十」は、成数〔まとまった数字〕をあげて表現したものであり、「生年を推測する、最も信憑性のある論拠にはならない」。

この蕭・余の説は、周説を充分補足して、七〇〇年生年説をより説得力あるものにしていく。これによれば、李頎詩（「五十無産業」）の数字は、高適の詩句（「人日寄杜二拾遺」）とも合致する。したがって、李頎の詩は抛るに足らないと述べた譚優字の説は、ほとんど誤りといつてよい。

ただ李頎の「五十無産業、心軽百万資」は、高適の瀟達豪爽さをほめたたえることに主眼があるため、高適の實際

年齢は五十より少し下かも知れないという説もある（左云霖『高適伝論』、人民文学出版社、一九八五年）。この意味では、後述の孫欽善の七〇一年生年説では、当時、四十九歳となり、注目される。しかし、これもやや主観的な問題に属し、五十歳では不適切であるというわけではない。

続いて、孫欽善の「高適年譜」（上海古籍出版社刊『高適集校注』、一九八四年所収）にみえる「七〇一年生年」説の論証を見てみたい。これは、周説より一年遅い生まれである。

高適「別章参军」詩に、「二十解書劍、西遊長安城。……白璧皆言賜近臣、布衣不得干明主。婦來洛陽無負郭、東過梁宋非吾土」とある。「干は干調、負郭は都市近郊の良田、蘇秦の故事による。梁・宋は今の河南省の地名）。つまり、高適は二十歳のとき、都長安に遊んだが、志を得ずに帰り、梁・宋の地に仮寓した。また、高適の「淇上酬薛三抛、兼寄郭少府」詩に、「自從別京華、我心乃蕭索。十年守章句、万事空寥落。北上登薊門、茫茫見沙漠」とあるのによれば、長安を離れたのち、北の薊門（幽薊の地、北京、河北省北部周辺）に遊ぶまでの期間は約十年間である。高適の「魯郡途中遇徐十八録事」詩の「弱冠負高節、十年思自強」も、この経歴をいう（弱冠は二十歳）。また、高適の「途中酬李少府贈別之作」詩に、「余亦慙所從、漁樵十二年。種瓜漆園裏、鑿井盧門辺」とある。これは、梁・宋の地に仮寓したころを回想した言葉であり「漆園・盧門は、梁・宋の地名、仮寓した期間が〔十年ではなくて〕、じつは十二年であることを確かめえる。高適が薊門に遊んだのは、開元二十年（七三二）に始まる。「入京時の」二十歳に、さらに十二年〔無官隠棲時代〕を加えると、開元二十年当時、高適は三十二歳である。これにもとづいて逆算すれば、七〇一年生まれとなる。

〈孫欽善自身による七〇一年生まれの傍証〉

- ① 天宝五載作の「四十猶聚螢」(a詩)の場合、四十六歳である。これは成数で表現したもの。
- ② 天宝八載作の「年過四十尚躬耕」(b詩)の場合、四十九歳であり、「年は四十を過ぐ」と称してもよい。
- ③ 同年作の李頎の「五十無産業」(c詩)の場合、四十九歳を成数の「五十」で表現したと見なしてよい。
- ④ 天宝九載(七五〇)作の高適「酬秘書(郎)弟、兼寄幕下諸公」詩の序に、「司業張侯、周旋追茲、僅三十載」とある(周旋は交遊、僅は近の意)。開元八年(七二〇)、長安に遊んで知りあって以来、天宝九載に到るまで、ちょうど「三十載」である。
- ⑤ 高適の「人日寄杜二拾遺」詩には、長安から帰つてのち、天宝八載に仕官する以前の無官隠棲期間を、「一臥東山三十春」という。この三十年は、たぶん「二十九年」の成数をあげたものであろう。

孫説のなかで注目すべき指摘は、長安から帰つてのち、北の薊門に遊ぶまでの期間を「十二年」であると見なした点である。ただ問題となるのは、高適の最切の北遊を開元二十年(七三三)に断定しうるかどうかである。高適の「信安王(李禕)幕府詩」の「開元二十年、云々」の序や、詩中の内容から、少なくとも開元二十年春(三月ごろ)には、高適は北の幽州にいたことが判明する。しかし、高適が同年初めて北遊したかどうかは、現時点では確定しにくいのが実態である。彭蘭・譚優学・劉開揚(『高適詩集編年箋註』)に収める「高適年譜」などは、開元十九年に北遊したと考へ、なかでも譚優学は、開元十八年も知れないという。周勳初は開元十八年とする。こうした諸説の生ずる原因の一つは、高適の北遊の理由を、信安王の契丹征伐(開元二十年正月に出征し、同年三月凱旋)への参加に求めるか、あるいは、すでに滞在していた燕の地で信安王の出征を聞いて、その幕府への参加を求めたと考えるべきかにかかわるようである。しかし、現在のところ、それを判定しうる資料に乏しい。これはまた、孫欽善説の弱点であり、前掲の開

元十九年北遊説にたてば、その結論は七〇〇年生生まれの周勲初らの説と重なりあうことになる。要するに、現時点では、七〇〇年、もしくは七〇一年生まれの両説を併記して、将来の研究の進展に期待すべきであろう。

周・孫の両説とも、生年を探る重要な論拠は、天寶八載（七四九）、高適が宋州刺史張九臯（張九齡の弟）の推薦によつて有道科⁽⁶⁾（制舉の一種）に及第し、すぐさま封丘の尉に任ぜられたことである。宋州刺史張九臯の推挙は、新旧『唐書』高適伝に記され、また敦煌発見の『高適詩集』の残巻内にあった「奉寄平原顔太守「真卿」詩の序にも、

今、南海太守張公「九臯」之牧梁也、亦謬以僕為才、遂奏所製詩集於明主「玄宗」。

とあって、疑いない事実である。「梁に牧たり」とは、睢陽太守（＝宋州刺史）就任を意味する。

天寶八載の有道科及第は、『郡齋讀書志』卷四上、高適集の条に見える（『登科記考』卷九も同じ）。しかも天寶八載當時、張九臯が宋州刺史であったことは、蕭昕の「張公（張九臯）神道碑」（略称。『全唐文』卷三五五）によつて充分推定可能である。そして、同年の盛夏、入京して有道科を受験し、十日もたたないうちに封丘の尉を授けられた経緯は、高適の「謝封丘県尉表」によつて明らかである（高適の「答侯少府」詩も参照）。譚優字は、高適の「謝上彭州刺史表」（七五九年作）によつても、封丘の尉就任が天寶八載であることを推定しうるとする。なお詳しくは、傅璇琮「高適年譜中の幾個問題」（『唐代詩人叢考』）をはじめとして、孫欽善・劉開揚・譚優字の説参照。

高適の生年推測の論拠資料には、すでに述べたごとく、この天寶八載の有道科及第と封丘の尉就任（初めての任官）と関連するものが大部分である。したがって、この事跡を誤ると、その生年の逆算は少しずつ狂うことになる。たとえば、彭蘭の場合、蕭昕の「張公神道碑」を見なかったために、張九臯の宋州在任期間を開元二十三年ごろに見誤り、有道科の及第を天寶八載とする『郡齋讀書志』の説を誤りとする。

七〇六年生まれを唱える彭蘭説の論拠は、高適の「四十猶聚螢」の詩句である（a詩）。しかし、その誤りは、すで

に蕭・余説の⑦の条で指摘されるとおりである。しかも、論拠の「四十猶聚螢」は、「一生徒羨魚」と対句を形成する。したがって、「一生」と対をなす「四十」も、実数とは捉えがたいことは明瞭であらう（傳璇珠の説）。この意味では、譚優学も同様の誤りを犯している。

ちなみに、王達津の「詩人高適生平系詩」（『唐詩叢考』）にみえる「六九八年生年」説は、天宝八載の有道科及第にともなう封丘の尉就任時を、開元二十三年（七三五）に誤ったために生まれた結果であり、今日では全く否定されている。

ところで、譚優学の七〇七年説は、じつは劉開揚が一九五七年三月二十四日の「光明日報」文学遺産の欄に発表した「試論高適的詩」にもとづく（のち、『唐詩研究論文集』に再録）。そのさい、劉開揚が生年を推測する論拠としたのは、高適「重陽」詩の「百年將半仕三巳」の句である。しかし、この詩は、宋の程俱『北山小集』巻九に収める「九日写懷」詩であった。この偽作問題は、すでに『四庫提要』巻一四九、高常侍集の条に指摘されている。のちに、劉開揚自身、この誤りに気づいて、七〇七年生年説を撤回し、七〇四年生まれとする（後述）。

もっとも、譚優学の七〇七年説は、劉開揚の旧説にのみ依拠しているわけではない。その論拠の一端は、すでに論評を加えたが、また次のようにもいふ。

乾元二年（七五八）に成る杜甫の「寄高三十五（適）詹事」詩に、「相看過半百、不寄一行書」とある。当時、高適は五十二歳であるので、「半百（五十歳）を過ぐ」とあう。七〇〇年説では、五十八歳であり、「過半百」の語は不適切である。杜詩のなかでは、こうしたおおざっぱな表現はしないはずである。

この箇所だけを読めば、譚説も説得力がある。しかし、譚優学は、高適の「人日寄杜二拾遺」詩の「一臥東山三十

春」などを見落し、七〇七年説にあわないう李頎の「五十無産業」の句は、交遊の浅い友人の発言であるので信頼できないとするなど、立論自体にかなり無理がある。今日、天宝八載の封丘尉就任時の高適の年齢が五十歳ごろであることは動かず、当時、四十三歳とする譚説はやはり誤りとするべきであろう。

〈劉開揚の七〇四年生年説〉

劉開揚の「高適年譜」(『高適詩集編年箋註』所収)に見える七〇四年説の論拠は、以下の三点である。

- ① 天宝八載(七四九)の詩に、「年過四十尚躬耕」(⑥詩)とある。当時、高適は四十余歳であった。
- ② 同年作の李頎の詩に、「五十無産業」(⑦詩)とあり、五十歳に近い。

③ 杜甫の「王〔掄〕竟携酒、高〔適〕亦同過、共用寒字」詩の原注に、「高〔適〕每云、『汝〔杜甫を指す〕年幾小、且不必小於我』。故此句〔詩中の「頭白恐風寒」の語〕戲之」とある。もし天宝八載(七四九)に四十八歳(七〇二年生まれ)ならば、「七二二年に生まれた」杜甫よりも十歳年長であり、杜甫に対する高適の言葉にあわないう。当時、高適が四十八歳だとすれば、杜甫より八歳年長となり、①②③ともに通じる。

この劉開揚説では、杜詩を論拠資料とする点が新しい。しかし、その原注の理解のしかたにおいて、高適と杜甫の年齢差が、十歳はだめ、八歳はよい、とする点は、かなり恣意的な捉え方であり、説得力にやや欠ける。七〇〇年生まれを唱える周勳初は、この杜詩注の高適の言葉に対して、次のごとくいう。

当時(上元二年)、高適はすでに六十二歳であり、十二歳年下の杜甫も、すでに五十歳である。高適は平素から壯健であり、杜甫の「送高三十五書記」詩に、「高生跨鞍馬、有似幽〔州〕并〔州〕兒」とある。ところが、杜甫は本年前後、すでに一度ならず「老」をいう。それで高適が「不必小於我」といったのである。ここには、互いに言葉

でからかいふざける気持がある。¹²⁾

二人の年齢差が十歳以上、離れていても、別にさしつかえなさそうである。劉開揚説の場合、李頎の「五十無産業」を四十六歳にまで下げ、また、長安から離れた以後の無官時代約三十年を二十六年間とすることにもなり、いささか矛盾が生じよう。

結局のところ、現時点では、七〇〇年、もしくは七〇一年生まれとする周勳初・孫欽善らの説が、論拠・傍証の多様さ・綿密さという点で、最も説得力をもつといえよう。ちなみに、聞一多「唐詩大系」は、「七〇二?」とする。¹³⁾

〔備考〕

蔡振念「高適年譜新編」(中国文化大学中国文学研究所碩士論文『高適詩研究』、一九八一年所収)にみえる七〇六年生年説の論拠は、彭蘭のそれと全く同じであり、したがって誤りと考えられる。

また、阮廷瑜「高適年譜」(中華叢書編審委員会刊『高常侍詩校注』、一九六五年)は、陶重華(名は光)の説にしたがって、七〇七年生まれとする。七〇七年生年説では、結果的に譚優学の説と同じくなり、その誤りは明白といえよう。しかし、この阮廷瑜説は、かつて吉川幸次郎『杜甫詩注』(筑摩書房)などで参照された代表的な旧説なので、いちおうその論拠を検討しておきたい。

① 高適の「酬秘書弟、兼寄幕下諸公」詩の序に、「乙亥歲、〔高〕適微詣長安」とある。これは、天寶六載(丁亥)、詔して天下の一芸に通ずる者を徴して、都で受験させたことと関連し、序の「乙亥」とは「丁亥」の誤りであろう。高適は、この後、ほどなく封丘の尉となった。

② 同じ詩の序に、「司業張侯、周旋迨茲、僅三十載」とあり、また、詩中に「相思三十年、憶昨猶兒童」とある。

〈陶重華(阮廷瑜)の結論〉

②の表現、および、四十すぎに徴されて仕官したこと〔前述の⑥詩など参照〕を勘案して、仮りに天寶六載（七四七）を四十一歳に定めると、三十年前は「十歳ごろとなり」、児童の交遊をなしえる。

封丘の尉就任を天寶六載とするのは、「天寶八載」の明らかな誤りである（既述）。天寶六載の制科では、全く及第者が出なかつたことは、元結「喻友」（『全唐文』卷三八三）や『資治通鑑』卷二一五、天寶六載の条に明記されている。もっとも、この点については、同じく天寶六載の封丘の尉就任を唱える彭蘭のごとく、落第はしたものの、県尉に任ぜられたとする弁明もあるが、かなり苦しい解釈である。また「乙亥」を「丁亥」の誤りとする陶重華〔阮廷瑜〕の説は、当時、制科が一度ならず行われていることを考えれば、軽率な判断といえよう。

要するに、彭蘭・王達津・阮廷瑜（陶重華）・蔡振念らの説は、いずれも高適の生年を探るうえで「關鍵」となる天寶八載の有道科及第と封丘の尉就任を適切に把握できなかつたために誤つた結果であり、現在では、ほとんど依拠するに値しないと見えよう。⁴⁴

注

- (1) 傳旌は、李頎詩こそ、高適の生年を考える重要な資料とする。
- (2) 山東教育出版社、一九八三年。
- (3) 『開封師院學報』一九六〇—七。ただし、筆者は未見。
- (4) 『文史』三輯（一九六三年）所収。
- (5) 中華書局、一九八一年。
- (6) 有道科は、毎年、春に行われる常科よりも評価の高い、天子自ら主宰する「制舉」（制科）の一種であるらしい。高適はみづから「常科に預ることを恥」じていたという（『河岳英靈集』卷上）。受験が「盛夏」であることも、制舉であることを物語る。有道科の先例としては、李白が蜀にいた若き日、推挙されたが、辞退したことが思いおこされる。寛久美子「李白伝」には、「在野の有能・優秀な人材を各地方官が推薦して、中央で試験し、及第すると官吏に登用した。時代とともにその内容

(実態)は変遷したらしく、他薦のこの制度と、自薦をたてまえとする科挙試が形をととのえつつ併存した唐代で、どの程度それが実質的な内容をもっていたのかはよくわからない」とする(『唐代の詩人―その伝記』)。張九臯が高適を推挙するとき、その詩集を献上していたこと、制挙に及第しながら、宰相李林甫のために地方の一県尉の地位しか与えられず、高適は強い不満と憤りを感じたことなどの点については、劉開揚の『高適年譜』や、周勳初の『高適年譜』参照。また制挙については、傅璇琮『唐代科挙与文学』(陝西人民出版社、一九八六年)参照。

(7) 「臣藝業無取、謬当推薦、自天〔皇帝の比喩〕有命、追赴上京〔長安〕。曾未浹旬、又拜臣職」とある。「浹旬」は満十日の意。

(8) 「詔書下柴門、天命敢逡巡。赫赫三伏日、十日到咸秦〔長安〕。褐衣不得見〔皇帝〕、黄綬翻在身」とある。黄綬は、県尉の官印を下げる黄色いひも。

(9) ただし、彭蘭は、この詩の作成年代を、天宝五載ではなく、同四載の作とする。これは、詩題の「平陰亭」を、杜甫の詩の「歷下亭」(陪李北海〔邕〕宴歷下亭)や新亭(同李太守登歷下古城員外孫〔李之芳〕新亭)と同一視して、錢謙益の「少陵先生年譜」(『杜詩錢注』)などを参照して生まれたものである。しかし、杜詩の二亭はそれぞれ別のものであり、高適詩の「平陰亭」は、杜詩の亭のある濟州歴下(濟南)の西南約一四〇キロの東平郡の旧地名「平陰」にあるとする説が有力である(孫欽善・劉開揚・周勳初)。ちなみに、譚優字は彭蘭の説に近く、平陰亭を杜詩中の一つとするが、詩の作成年代は天宝五載とする。高適詩の作成年代を天宝五載とする説は、詹鍇『李白詩文繫年』にもとづいているらしい。もつとも、両説はわずか一年違いなので、論旨の展開には、さほど大きな影響はない。

(10) 孫欽善『高適集校注』や劉開揚『高適詩集編年箋註』参照。

(11) 劉開揚は、影印『宋本杜工部集』に「小」字のないのが正しいとして、「小」を衍字とみなす。

(12) 鈴木虎雄『杜少陵詩集』第二巻には、「適がふだん作者〔杜甫〕を年よりといひをれるによつて、作者がこの詩に於て適を老なりといひてたはぶれしなり」と注する。

(13) 楊殿珣『《中国歴代年譜総録》続録』によれば、徐無聞『高適詩文系年稿』(『西南師範学院学報』〔社科〕一九八〇―二)も、七〇二生とするらしい。また傅璇琮は、生年の確定は困難としながらも、七〇〇～七〇二年の可能性が比較的大きいとする。

(14) したがって、「阮廷瑜の説は、ほぼ首肯できる」とされた鈴木修次「高適と杜甫」(『唐代詩人論』高適論、講談社学術文庫所収)の論の一部は、今日かなり書き改められなければならない。ちなみに、同論文は、王逢津・阮廷瑜の二説を参照して論を展開している。また、同書に、「徐松の『登科記考』は、玄宗の天宝8年(七四九)、高適が進士に及第したことをしるし

ているが、高適は有道科であったこと史書に明文がある」という。これは誤解で、徐松もやはり有道科とする。

※弘前大学図書館参考係の森下志郎・板垣洋子両氏には、資料の収集の面で多大の労力をおかけした。ここに紙面を借りて深く感謝したい。